



# わたしの聖戦

女性が働くことについて

133

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 病気を つくる 医療

相変わらずの健康ブームが続いている一方で、論文改ざんなど医療への信頼を失くすような報道も目につく昨今である。

現在、日本で一番患者数が多いのが高血圧だ。しかし、この高血圧という代物、どうにももうさくさく思えて仕方がない。何はともあれ、検査ありきの医療にあって検査結果が少しでも基準値を外れてしまうとすぐに「病人」にさせられる現代である。基準値というのは各学会で定められるため、最も信頼できるように思えるが実は最も信用できない。なぜならそこは製薬会社や厚生労働省の思惑が見え隠れする密室の

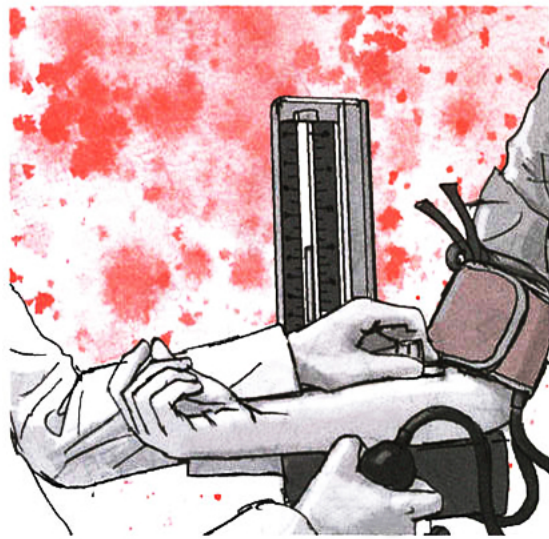
世界であって、本当に国民のためというココロが一向に伝わってこないからだ。

1999年までは70歳未満の血圧基準値は上(最高血圧)が160、下(最低血圧)が95であった。それが、2000年には65歳未満の場合は130と85になり、2004年には日本高血圧学会によって、65歳未満はそのままで、65歳以上の高齢者については、「降圧目標値」(下げるべき数値)が140〜160から140未満に引き下げられた。実際に135で高血圧と指摘され、薬を処方されたという人の声も耳にするようになった。つまり

高血圧というのは、基準値を操作することで、一気に患者が増えるということになる。

135で高血圧とはいかにもひどい。国民もそろそろ何か変だと気づきはじめている。

1960年代には、年齢別の平均血圧として、



象であり、強い違和感が残る。

もともと血圧は変動が著しく、ちよつとしたことで上下するもの。基準値を決めてそこから外れたら高血圧だとする今のとらえ方は、実はふさわしくないのである。

ところが、血圧にまつわる薬や健康食品はやたら目につき、たまに高血圧から脳卒中を引き起こしたという話を聞くと、もう怖くてしかたなく、かつ医者言うことには反論できず、そのまま言いなりになってしまいうケースがほとんどである。

「年齢数に90を加えた数字」を算出し、これより低ければ高血圧ではないと判断する、大変アバウトなものであった。それがほんの少しの数字の變化であつさり高血圧と診断され、薬を毎日必要とする事態は、いかにも「つけられた病気」っぽい印象だ。コレステロールも似た傾向があり、高脂血症が脂質異常との呼び名に変わるというおまけまでついた。ただし、こちらには総コレステロールだけ見るのは意味がなく、LDL(俗に悪玉と呼ばれる)の値こそ重要との注釈がついているので、まだましかもしれない。

高血圧や高脂血症は怖くない、とか、放っておけと主張しているのではない。あくまでココロが変わる基準値を鵜呑みにして、一喜一憂するなど言いたいだけである。

「薄毛が気になったら病院へ」と促し、「腹囲82〜90センチはメタボ」と定義する有様は、「病気を つくる 医療」というより「脅かしの医療」ではないかと言いたくもなる。

基準値とは、学会が一律に決めたものではなく、「自分の基準値」、つまり若いころの血圧やコレステロールや体重などがどう変化していくのか、という経時的な視点に基づいたものであるべきだ。ゆめゆめ自分のからだとそこを要らぬ薬に縛られることのないように。何物にも捕らわれない自由を樂しむことこそが、真に健康な人なのだと思

イラスト・伊藤栄章